

1 はじめに

今日は難しいテーマを振られて当惑しています。なぜそうなったかは、ひとえに篠原先生が悪いのです。もう一つは、私が、現在白表紙で検定を受けつつある、中学公民の教科書の執筆を十数年やっていることが理由でしょう。

今回の執筆は、大変でした。指導要領が大幅に変わりました。新しい領域が付け加わったのです。これは書き手にとっては未知の領域です。ライバルの教科書会社は何を書くのか全く分からない状況で書かねばならなくなりました。そこで、指導要領を読んだのですが、そこにはヒントになることは書いてなくて、「あとは自分で考えろ」と言う、私が時々学生にやるようなことしか書いていません。そもそも公正とか正義というのは、アリストテレス以来の難問です。これを中学生にどう教えるかということになります。いろいろ考えたのですが、最後は「エイヤ」ということで書きました。このように苦労して書いたということを知っていただきたいと、まず思います。とくに指導要領を作る側におられた篠原先生には。

ところで、教科書執筆、特に中学校の教科書はいろいろな制約があります。まず、字数の制約。そのなかで中学生に理解してもらえるものを書かねばなりません。もう一つは、実は、本当に中学生に理解してもらえるものを書いてはいけない、という制約もあるんです。そうしないと先生の出番がなくなる。先生が教室で解説して、生徒から「先生はよく知っているな」と思ってもらえるような内容にしておかなければいけないのです。採択するのは、教育委員会なり先生たちですからね。生徒がすらすらわかるものを書くのも大変ですが、大人が分かるものを制約の中で書くのはもっと大変です。それはあたかも、俳句や短歌のようなもので、短い文章の中でかつ、言外にすべてを含めて書く。その言外に含めた思いを再生していただくのが現場の先生なんです。

2 日常における効率性の問題

本題に移ります。まず、効率性という概念の問題を取り上げます。効率性に関しては、次のような日常的な事例を話題として取り上げます。どれも答えはありません。

第一の話題は、クラブ活動を指導している先生のケースです。効率を考えると上手な選手をそろえて勝ちに行く。それに対して、一生懸命取り組んでいるけれど下手な生徒もチームプレイを味あわせてやろうと言うのは、教育です。これは効率以外の目的が入っています。これを公平とは言いませんが、それに近い価値が入っています。

第二の話題は、経済学と関係があります。能力の高い人だけが仕事をして、高齢者とか障がい者はじゃまだから生産に参加しなくてもよい、となると効率的な経済ができます。ところが、働くことの意味を、ものを作るという意味だけではなくて、働く喜びとか社会への参加や自尊心まで含めるなら、そういう人まで参加することに意味がある。ここでも効率とそれ以外の目的をどう組み合わせるかが問題になります。

三番目は教育です。偏差値の高い人だけを集めたら大学の先生はやりやすくなります。「東大の先生は楽勝だ、先生が間違えても学生が直して聞いてくれる」などと、私たちは冗談で言います。偏差値が低い大学だと、先生の言うことを全部真実だと思う学生がいる

んですね。怖いんですね。知識の受け渡しだけが大学の目的ならば、偏差値の高い学生をあつめれば効率の良い教育ができる。ところが社会をよりよく生きる有意な人材を育てることが目的ならば、大学のキャンパスは社会の縮図でなければならない。つまりいろんな人がいないと社会の縮図にはならない。これは日本の公立学校の理念です。

同じようなことをアメリカのハーバードでやっている。ハーバードの試験は、その卒業生がやっている。ハーバード方式です。世の中は変わった人、変わった国だらけです。そういうなかで指導力を発揮したり、ものを考えたりできる学生を育てようとしたら、賢い人間ばかり集めていたらできない。だから偏差値でない、多様な人材を集めているんです。

四番目は建物です。最大限の耐震性を備えた建物は有用かということです。阪神大震災から学んだことです。「マグニチュード7であれ8であれ、どんな地震が来ても絶対に倒れない建物はつくれるか？」と建築家に質問します。「そんなの簡単や。コンクリートの建物を作ればいいんや。でも、そんな中、部屋ないで」。建築家の答えです。つまりここで必要なのは妥協です。目的に対して合目的な効率性を追求するのか、他の目的とのバランスを取るのかです。建築家がいつも苦心しているのは、このバランスです。もうちょっと耐震性を高めて、もうちょっと不便になるのがいいのか、もうちょっと便利になるけれど、もうちょっとリスクの高くなるのを認めるかです。

五番目は、街づくりです。無駄を一切排除した町は住みやすいか。効率的な街、便利な街ができます。でも、便利だけが人生の目標でしょうか。こういう町はちょっとした非日常的なできごとに対応できない。これはリダンダンシー (redundancy) という言葉で、震災後語られました。これは冗長とか余分という意味です。市内に公園などがたくさんある。駅前にも公園がある。「無駄や、なんでもっと効率的に使わないのか」。これは効率主義の発想です。しかし、何の役に立つかわからない公園があることによって、何百年に一回の地震があったときに、人の命が救われる。そういう経験をしました。ということは、ぎりぎりの効率性の追求をしていたら弱いということです。

ちょっと変わると弱い。これは教育の世界でもいえることです。ぎりぎりの努力を子どもにさせる。伸びきって、伸びきって、予定通りに行けばいいですけど、人生何が起こるかわからない。環境がガラッと変わった時にどうしてよいかわからない。そういう子は糸が切れてしまう。何もできない。余力を残している人間は、何かあっても「まあこんなもんや」と、新しい環境に適応できるかもしれない。それと同じで、街も、建物も、会社組織も、社会全体も、ぎりぎりの効率性を追求していったときには、一つの目的に対しては強いけれど、目的が変わった時には弱い。

最後は、環境衛生のととのったところで子供を育てた方が良いかどうかです。これは日本人の潔癖症で、こどもに一生懸命手を洗いなさいという指導などがそれです。たしかに、インフルエンザや食中毒の予防には必要です。でも、元阪大の学長さんで免疫学の権威である私の知人は、「あれは人類を滅ぼす」と言っています。私たちの体でも手でもばい菌がいっぱいついている。それと共生しているのが人類のシステムです。そのバランスの中で生きているのが私たちです。極端に衛生的な環境で子供を育てたら、免疫が育たない。なにかあった時に対応できない。新しい細菌やウイルスがでてきたら、みんなばたばたやられてしまう。だから、「こどもは汚い環境でそだてなあかん」というのがその先生の持論です。これも短期的な効率性と、長期的に免疫力のバランスを考えた時の答えは違うという

例です。

このような事例が日常的な生活から効率性が問題になる事例です。

3 効率性の特色

このような効率性が何時ごろから問題になってきたのか。これは近代精神の所産です。デカルトの「われ思う、ゆえにわれ在り」から出てきた思想です。近代は、神から分かれて、世俗主義の時代になり、機能主義の時代になり、合理主義の時代になったわけです。この合理主義から効率の考え方が生まれてきます。合理主義、機能主義、効率という考え方が出てきたわけです。この効率の考え方が、産業革命につながり、文明の発展につながる。そして技術の発展につながり、物質的な改善になり、われわれの環境の改善につながってきた。

効率とは、あるものをぎりぎり、無駄なく、上手に使うということです。無駄はもったいないという発想です。合目的合理性です。ところが 20 世紀にこれを追求していった果てに、ついにこれが手段から目的に転換していった。合理的なものは美しいとまでいってしまった。だから流線型の N700 系の新幹線は美しい。もともとは空気の抵抗をなくそうとしてデザインされたものですが、機能美が発揮されたものとして美しいとなってしまった。建物も同じです。それ以前の、機能よりも別のものをメッセージしている建物とは違う。機能美が近代的、現代的な美しさとなるまでに帰着した。効率的であること自身が究極的な価値の一つになってしまったのです。効率的でないことは悪なのだということまで行ってしまったのが、この 21 世紀の初頭の価値観です。でも、効率的というのは、何かを達成するための手段なんです。

経済学では、パレート効率性、むかしはパレート最適という言い方をすることがあります。図を見てください。非常に簡単に書きましたが、縦軸に A さんの幸福、B さんの幸福を横軸にとってフロンティアを書く。そうすると A さんの幸せを追求すると B さんの幸せが損なわれる。B さんの幸せを追求すると A さんの幸せが損なわれる。トレードオフの関係です。両方とも成り立つというわけにはいかないというのが、このフロンティアの意味です。

パレート最適の意味は次のようなことです。いま A さんと B さんの幸せがフロンティア内側にある。その時には、お互いの幸せをフロンティアの上に持って行けば、もっと幸せになることができる。そして、そのことは無条件にいいことだということです。だれも損をしない。みんなよくなる。それっていいことじゃない。でも、フロンティア上での移動を考えると違ってきます。A さんの幸せを追求すると B さんの幸せが減ってくる。そういう状況になります。反対も同じです。だれかの犠牲なくしてだれかの幸せを改善できない。それがフロンティア上の状況で、パレート最適です。経済学では、フロンティアの内側はまずい、でもフロンティア上に持って行くことはいいことだと考えます。

非常に納得的だともおもいませんか？ところが、この考え方には落とし穴があります。A さんも B さんもフロンティア上に行くのはいいんです。でも、フロンティアになった時、A さんの有利な点と B さんの有利な点とどちらがいいのか、答えがないんです。なぜなら、効率的という点ではどちらも同じだからです。だから、A さんの幸せに重点を置くのか、B さんの幸せに重点を置くのか、どちらをとるかという点では答えが出ないんです。これはだれかが決めなければいけないのです。

話は飛びますが、政治の世界で究極的な選択というのは、人に死んでもらうことです。例えば、アメリカの大統領は軍隊を動かして戦争をします。そうすると、あなたと、あなたと、あなたは戦争に行つて死んで来てくださいという命令を出すわけです。それによつてほかの国民は助かる。その結果自由が守れる、大事なものが守れる。つまり、何人かに死んでもらつてほかの人がいい目にあう。それを決めるというのが政治です。さっきの例では、Aさんの幸せを犠牲にして、Bさんの幸せを守るということを決めるということです。これが一番厳しい決断なんです。日本の政治家はこういうことを考えていません。「みなさんの合意にしたがつて判断しましょう」。そんなことなら私でも政治家ができます。みんなが認めることだけをやる。一人でも反対する人がいたらやめる。それは違うんです。トップリーダーというのは、一部の人に犠牲になってもらう。その代り、生き延びた人が将来の世代につなげる役割を果たす。その方がいいんですということを判断して、決めるという役割を果たす人です。

ちなみに、日本は危機管理ができていないと言われていています。日本の最高の意思決定者は総理大臣ですが、総理大臣に事故があった時の、職務継承権限者はだれだと思ひますか？これは官報に広報されます。第二位は、官房長官です。これは官職指定です。みなさんは、組閣の時にそういう気持ちで見えていますか？あの方が官房長官で、もしかしたら、あの方が自衛隊を動かすかもしれないと、大丈夫かなあという意識で見えていますか？見えていないでしょう。ということは、私たちの側にも危機管理がないということです。三番目は誰だか知っていますか？知らない？実は決まっています。七番目までを決めなければいけないのですが、それは組閣した時に総理が決めるんです。防衛大臣は入っていると思ひますか？ご存じないでしょう？ある防衛大臣は入っていました。ある防衛大臣は入っていませんでした。つまり、防衛大臣であるがゆえにではなく、だれが大物かで決まるのです。文科省は、自分のところの大臣には絶対に来ないと思ひています。

アメリカでは、副大統領が職務継承権限者ですが、全部で23番目まで決まっています。その23人は、同じ時間に同じところには決していないということになっています。イギリスの王室でも同じです。飛行機が落ちたときにどちらかが生き残ってもらわなければいけないから夫婦でも同じ飛行機には乗らない。あれは夫婦仲が悪いから別々に乗るのではなく、危機管理なのです。

要するに、二つの価値の判断はしないというのが効率です。効率というのはプロセスを上手にやつてゆくかというのが目的であつて、どの地点がある目的よりもすぐれているかは言わないということなのです。だから中途半端なのです。

4 公平さの難問

次に、公平さの難問について考えます。事例からゆきましょう。

アリとキリギリスの話です。今、社会保険料を払わないひとがいます。その人が高齢者になり無年金になって、貧困化した。社会はこの人を救うべきかどうか？要するにこの人はキリギリスです。ほかの人はアリさんで一生懸命準備をしてきたわけです。そのキリギリスの人が、「助けてくれ」と来たらどうしますか？生活保護の対象にしますか？

考え方は二つです。日本国憲法のもとで、健康で最低限度の生活は保障されているから過去は問わない、今その人が生きてゆくことが大切だから、社会はサポートしなければいけないというのが一つ。今、日本の社会はどちらかというところこの考え方に立っています。

しかし、そこに至ったプロセスから考えると、それはフェアですか？

次の話に行きます。ある人が、崖下の家において、危ないから退去せよという専門家の勧告をうけいれず、住み続けたいと言い張ったらどうしますか。この人を強制的に退去させることは、今の日本ではできません。法律がありません。なぜならば、日本国憲法が最も重要な価値としているのは個人の自己決定権だからです。その人が「ここでええねん」と言い張っている場合、その人を強制的にどかすことはできません。でも、その人が本当に災害にあったらどうするんですか？これは日本の法律体系のいいかげんなところですよ。裁判になったら、自治体は負けます。自治体が分かっている、放置して、被害が出た。その時は、わかっていたけれどさぼっていたとして自治体がとがめられます。個人の自己決定権と被害を防止するのとどちらが大事か？憲法は自己決定権が上と書いてあります。でも、自治体は悩んでいます。

災害要支援者というのがあります。一人では逃げられない人です。効率を考えると、その人が、家のどこにいて、どこに寝ているかまで知らなければいけない。民生委員さんを通して情報を共有して助けたい。でも、厚生労働省では、個人のプライバシーの侵害に当たるから、行政が持っている情報は外にはだせないと言います。助けることとプライバシーとどちらがだいじなんでしょうか？難しい選択がたくさんあります。

その選択は皆さんがやらなければいけないのです。災害になった、消防士が向こうの火を消しにゆく、でもここで家がつぶれている、おじいちゃんがそこにいる、たすけてくれと言われた。あなたが消防士だったらどうしますか？こういう厳しい選択の現場に救急隊の人は置かれるわけです。それもゆっくり考えている暇はない。一瞬で決断しなければならぬ。

災害の現場では、お医者さんはトリアージをしなければいけない。けが人がたくさんいる。優先順位をつけなければいけない。赤、黄色、緑、黒の札をつけてゆきます。時間がないからパッパッとつけてゆかなければいけない。黒は、もう助かる見込みがないから何もするな。緑はもう少し耐えられるから、ほっておいてよい。黄色は生命に関わりはしないが直ちに輸送しなければいけない。赤は緊急に搬送しなければ命が危ない。これを決めてゆかねばならないんです。あなたは何を決められますか。先生方が教えている子どもさんは、黒のタグを付けられますか？

さっきの消防士も、トリアージをやっている医師も、どう決断しても一生もってゆく決断になります。正しい決断はありません。パレート最適という牧歌的な話をしましたが、Aさんの幸せとBさんの幸せを一緒に悩んで決断するという事ではないのです。一瞬に判断して、それを一生もって行くという決断が求められるんです。そういう意思決定を危機管理には求められるのですけれど、なかなかそういう事はない。

話をもどしますが、必死に勉強しても成績が上がらない子どもがいます。私は中学のころ、どんなに一生懸命聞いても数学がわかりませんでした。そしたら先生が、「かわいそうやな、この子は。どうしてあげたらいいやろ。」と言ってくれました。一方には、頭が良くても適当に勉強している子がいます。この二人の子が60点をとった。この時どうしますか。ここからは、何を基準に評価するのかが問われているわけです。もし、努力を評価して点数を違えた時、「なんでうちの子とあの子の成績がちがうのか？」と情報公開を求められたらどうしますか？なかなか住みにくい世の中になったと思いませんか。

別の例です。檻のなかで飼われているトラと、野生のトラとどちらが幸せでしょうか？

檻の中では、食べ物の心配もないし、ほかの動物に襲われることもない。野生ではリスクが高い。けれどもこちらは自由があり、あちらでは自由がない。自由の価値はいくらかということです。

おなじようなことがアメリカの奴隷制度にもあります。奴隷制度はアメリカの歴史では汚点と言われているけれど、違う側面もあります。一般には、奴隷は主人に従属して、勝手に使われているだけというイメージがありますが、家族も売り飛ばされたりして過酷な労働を強いられていたというのが、アメリカ人の常識だったのです。ところがある研究者が調べたら、奴隷の方がいい暮らしをしていたケースが見つかったのです。奴隷の食べていたカロリーの摂取量が、白人の自由労働者の摂取量より良かったのです。黒人の家族は大事にされていたのです。家族をばらばらにしておくよりも、家族を大事にして、主人のために一生懸命はたらく気持ちを持ってもらう方が得ということなんです。主人に可愛がられた方がよい。『風と共に去りぬ』のなかで、スカーレットに仕えるおばさんです。家族同然に扱ってもらえる奴隷と、失業中の自由労働者とどちらが幸せかということなのです。

この本『タイム・オン・ザクロス(十字架にかかった時)』という本が出版されたときに、ニューヨークタイムズは、一面で、「これでアメリカの良心は救われた」と書きました。それで論争がまきおこりました。自由というものをどうとらえるかです。飽食で自由がない状況と、厳しい状況でも自由がある。あなたはどちらを取りますかという問題が突き付けられたわけです。

5 公正さと平等

公正の一つの基準は平等に扱うということなのです。これはアリストテレスまでさかのぼります。「平等な人間は平等に扱え、平等でない人間は平等でなく扱え」というのがアリストテレスの公正さの命題です。そしたらみんな平等にすればいいのか。信号をみんな黄色にしておけば公正なのかということなのです。これはもっとも平等ですね。東西も南北もみんな平等です。でも、それでは交通は動きません。これがいいのでしょうか。やはり、青とか赤が入れ替わって、今は南北が走る時期、今は東西が走る時期というというやり方がいいのです。これで公正さが確保できます。

日本で公正さを扱う時には、私の個人的な感想ですが、みんな黄色という公正さが多いような気がします。だから、日本経済がパッと走れないのです。

共産主義に関しても同じことが言えます。その理想は、みんな平等。働くのは平等、受け取るのも平等。これでは歴史的な進歩はありません。マンションで、輪番で決まっている役員を免れるために、もうちょっとお金を出すから役員は免除してくれというのがあります。これ最近はい多いです。子どもが塾行くから、クラスの役員勘弁してくれ。その代り授業料もうちょっと払うというのと同じです。これはOKですか？これも横行しています。マンションでは、どうしようもないから、管理会社に任せています。みんなお金を出して、仕事はプロにやってもらう。マンションの役員は、もともとコミュニティの役員だからみんな平等にやろうぜということできたんです。でも、それが変わっている。

公正さというのは、いろいろ変な形で使われています。アメリカの主張する公正貿易などもそうです。日本で、公正と名がつくのは公正取引委員会があります。独禁法の番人です。よくやっています。だましたりする不公平な競争をやらせない。フェアな競争でやりなさいというのが活動の趣旨です。競争だと勝ち負けがあります。それは仕方がないこと

です。でも、フェアでないルールで競争するのは間違いである。あのレフリーはあの国に甘い、この国に辛いというようなのは間違いです。

効率性も公正さも手続きの話です。フェアなルールである。あるいは無駄なく何かをすすめてゆく。でもこの時何をやるのが問題です。何のためにフェアなのか、無駄がだめなのか、究極的な価値に対して何が大事かはここでは言っていません。これが気になるところです。だから、大事なのは、「フェアで効率的な社会を作って、それでどうするねん」ということです。それを生徒にしっかり考えてほしいと思います。

昔えらい子がいました。小学校四年生の男の子です。「僕金持ちになりたいな」と言うんです。なぜ？と聞いたら、「僕、金持ちになったら一杯寄付するねん」と言いました。僕は、この子、ものすごくえらいと思った。そういう子どもを育ててください。「世の中の役に立つことをせい」と頭ごなしに言わずに、「金持ちになって、豪華なヨットに乗って、きれいな女の子と外国旅行するねん」といったら「あほか」と言い、「いっぱい寄付するねん」といったら「お前賢いなあ」と言ってやってください。

5 まとめ

そろそろまとめます。

この表は、アメリカの政治の循環を示した表です。だいたい 30 年を一区切りとして変化していることが書かれています。アメリカは 20 年間理想を求めるのです。理想を求めるということは、現代社会に対する批判をすることです。そこから努力しようということです。でも 20 年やると、しんどくなるんです。最後の 10 年は「もうええやんか」となります。そのサイクルを繰り返してきました。それを理想主義と現実主義の交代と言います。

第一次大戦の時がそうでした。アメリカは理想を掲げて、ヨーロッパまで出て行って若者を多く死なせました。でも、そのあと振り返ると何も得られたものがなかった。ベルサイユ会議は延々と、ヨーロッパの古参のタヌキおやじ政治家が、やれ賠償だ、やれ領地だといがみ合っている。こんなことのために、アメリカは若者を殺したのかという反省があり、幻滅がありました。こんなことをやっているならいつもの暮らしに早く戻ろうとリラックスしようとしたわけです。ここでアメリカは高度成長をしたわけです。女の子のスカートは短くなり、チャールストンを踊って、ベーブルースのホームランに踊り、シカゴではアル・カポネが出てくる。華々しいアメリカです。

その後の 30 年代は大恐慌です。40 年代は戦争です。そうすると理想主義が復活します。ニューディールがそれです。一方で、貧乏で死にそうな人がいるなかで、レストランで食事ができる人は、「全部食べるなちょっと残しておけ」というようなマナーができる。それを貧しい人に配る。このようなある種の連帯が生まれる。第二次世界大戦は、民主主義を守るという大義がありました。

戦後になると、自由、成長が価値を持つ。60 年代のケネディ、ジョンソン時代は、生活の質が大事だという価値がでできます。偉大な社会をつくろうというスローガンが生まれます。このようなスローガンが生まれるということは、アメリカは偉大な社会ではないと認めたということです。文化的退廃、労働者の疎外、環境破壊、十台の女の子の妊娠などあらゆる社会問題に直面して、偉大な社会をつくろうと 20 年間頑張るわけです。そのあと出てきたのがレーガン。「もういいやんか、アメリカは世界一の国だからリラックスしよう」と、ミーイズムの登場です。

ここから 20 年と 10 年というサイクルだった歴史が狂ってくるような気がします。それ以降は 10 年、10 年で区切られているような気が、私はしています。クリントン、オバマは、グリーンニューディールなどと理想主義的なことを言っています。その前のブッシュは、政治は力だと現実主義を言っています。

この表から言いたいことは何かというと、効率と公平は、いつの時代にも、フィフティ・フィフティで語られるのではないということです。ある時代には、効率性が前面に出てくる。ある時代には、それを直すために公正さが出てくる。それに伴い、人々の意識が変わってくる。公正さと言うのは、人間の行動を律するものだからきついのです。20 年たつてくると、「もういいやんか」となりリラックスする。ここからは、効率と公正は、今はどの時代、今はどの時代というように、どちらに力点を置くのかで変わるんだということです。

このように、効率と公正は、クルマの両輪のように、またさっきのすべての信号を黄色にしようというように平等に扱うのではなく、赤にしたり、青にしたり、長い時間を取るとバランスが取れていけばいいようにすればよいのではと私は思っています。

幸福の話をする時間がなくなりましたが、一つだけ取り上げます。

「イースタリンのパラドックス」と言うのがあります。日本は一人あたりの GDP が上がりました。その日本で、「あなたは自分の生活に満足していますか」という質問をすると、このようなグラフになります。つまり一人あたりの GDP と幸福度が離れてしまっているのです。これは日本だけでなく、先進国に共通なものと、イースタリンという人口学者が発見しました。彼はもっと正確に言っています。「一国のなかでは、貧しい人より豊かな人の幸福度の方が高い。しかし、歴史的にその国の一人あたりの生活水準が上がっていったからと言って、国民の幸福度が上がるとは限らない」。これを聞くと、日本は、なんか無駄なことをやっているように見えますよね。必死になって技術革新をして、海外進出をして、豊かになっても満足度はあがっていない。そうすると、目標を取り違えているのではないかという問いかけが出てくる。

幸福に関しては、ブータンのような国を上げる場合があります。そこの目標は、グロス・ナショナル・ハピネス (Gross National Happiness) あげることであり、GDP をあげるではない。来日したブータンのある大臣に、「GNH とはなんですか」と質問しました。その大臣は、私の持っている携帯をみて、「それ何ができるのですか」と聞きました。私は、「電話ができ、写真が写せ、インターネットに接続できる」と言ったのです。そしたら、その大臣は、「それが GDP の考え方」ですね、と言いました。その大臣は携帯を持っています。そして「私の持っている携帯は電話しかできません。これが GNH です」と言いました。電話は必需品です。でも、それ以上は不要なのです。なかなか説得的ですね。

必死に頑張っ、ニッチを発見して努力する。でも幸福度はあがらない。なんでそうなるのかを説明すると長くなります。一つだけ仮説を言います。人間は幸せを感じるのは相対的であるということです。上を見て、下を見て、上もあるけれど下もあるなあという感じ。高度成長の時期には、日本では 95% の人が中流意識を持っていました。みーんな真ん中だと思っていた。でも、それが本当なら、全体があがっても、いつまでたってもずーっと真ん中であるということになります。丁度、クラスの平均点があがっても、クラスの真ん中の人間は自分が上昇したとは思わないのと同じです。国の中でも真ん中にいる人は、自分が良くなったとは思えない、という仮説が有力です。

最後に幸福を測ることのむずかしさを言っておしまいにしたいと思います。

国連開発計画という国連の機関が作った「人間開発指数」と言うのがあります。GDP以外のデータを組み合わせて、人間開発がそれぞれの国でどれだけ進んでいるかを測ったものです。これは人間が持っている能力をどれだけ発揮できているかを指数として測ろうとするものです。図をみるとわかるように、日本はずっと10位以内に入っている。これを見ると日本って結構幸せな国なんだね、ということが分かります。

次は、一月くらい前の雑誌『ニューズウィーク』のランキングです。上位は小さな国が多い。経済力では日本は10位です。生活の質からいっても高いランクです。教育は5番目。「歳とっていちばん住みやすい国は日本」と、『ニューズウィーク』の特集は言っています。総合得点では、人口5000万人以上の国では、日本はトップなのです。

しかし、外国からの評価と、日本人の自己評価は違っています。少子高齢化だし人口は減っている。今教えている中学生が60歳になった時に、どうなっているか、不安だらけだし、不満だらけです。そう思っているでしょう。日本では、客観指標と主観指標が違うのです。この違いを正してゆくことも教育と言う面では、非常に大事なことです。

我々の観念は、テレビを見たり、人からの情報や、人と話をしたりして作られ手行きますが、時として、事実とは非常に異なることがあります。例を言います。日本で「インターネットは心配ですか」と聞くと、「心配」と答えるのは、20か国くらいの国際比較では、日本が一番です。「では、インターネットで問題や被害を受けたことがありますか」と聞くと、日本は最低です。つまり、私たちは、世界で一番安全なインターネット環境で過ごしながら、イメージ的には一番危ない環境にいると思っています。

同じような例があります。皆さんは日本はビルゲイツもいないし、そんな貧乏人もいない、所得分配が公平な国だと思っているでしょう。イギリスのような貴族の大邸宅もないし、大貧民も大富豪もいないと思っているでしょう。社長と秘書さんの給与の比率も10倍くらいのもので、アメリカでは何百倍ですよ。学校では、校長さんと新卒教員の給料の差だって大したことはいないですね。だから日本は平等の国だと思っているでしょう？けれどもOECDの調査では、日本は先進国の中で真ん中です。日本よりもっと平等の国もあり、もっと不平等の国もある。それほど自慢できるほど平等な国ではないんです。でも、みんなが平等だと思い込んでいます。それで政策が進むんです。これは危ない。

必要なことは、きちんとデータを自分で取って考えることです。

最後に同志社の校訓をあげておきます。この中に効率は入っていません。効率は手段です。無駄なく作って何に使うの、どんな社会をつくるの、どんな人間をつくるのということを考えることが大事だと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(記録・文責 新井 明)